生物学類カリキュラム委員長の任期を終えて

林 純一
生物科学系教授

産業構造がうねりをもって大きく変化していく中で，社会の要求を先取りし，的確に対応できる教育体制へと改革をせまられている国立大学。産業構造だけではない。入学してくる学生の価値観，人生観，大学に対する要望も大きく変貌しつつある。社会がリストラを繰り返し，生き残りを懸命に模索している中で，国立大学だけがこれまでのシステムをかえず大名商売をしていればよいという時代ではなくなってきた。そして独立法人化に向け，全国の国立大学は先を争うように大学の統合を含めた体制の見直しや，これまでの国立大学には見られなかった行き届いたサービス競争が始まった。かつて国鉄が民営化した時と同じ様な状況がそこにある。

生物学類のカリキュラムも例外ではない。これまでのように伝統的重みのある学習プログラムを提示するだけではすまされず，学生や社会の要望に対し迅速に対応しなければならなくなってきた。たとえば生物学類の入学者の中には，受験校の受験戦略などの結果，生物を選択していないケースが多くある。確かにその様な学生たちの要望を的確に把握し対応をすることは重要なことで，入学者の学力確保のため補習を始めた大学もあると聞く。またカリキュラムをクリアできるように学習支援システムを構築し学生のバックアップを始めた大学もあるようだ。

しかし，この過剰なサービス競争には大きな違和感を覚える。これは単なるスタンドプレーであり，教官の負担が増加するだけで，本当に良い成果をもたらすのかははなはだ疑問である。なぜなら，このような改革はあたかも中学生や高校生が授業についていくための，あるいは受験の際に困らないようにするための家庭教師派遣や塾を開設していることと同じだからである。そもそも準備したカリキュラムを滞りなくクリアーすることが重要なのも，正解があるのも高校の授業までである。このカリキュラムに対する価値観を大学にまで持ちこんで一体どう

するのだろうか。

家庭教師や塾の役割は，中学ではより良い高校に入学するためであり，高校ではより良い大学に入学するためである。それでは大学では？というところで思考が停止してしまう。そのため多くの新入生が具体的な目標を失って漂流するケースが多い。補習のおかげで卒業までに授業内容をすべて理解できました；次に何を勉強すればいいのですか；自分の進路は決まっていません；では何にもならないのである。

大学の授業内容は補習までしてきちんと理解するような大げさなものではなく，授業を通して自分の興味，能力，専攻すべき分野を見つけ，積極的な自主学習を展開するための動機付けとしてこそ価値がある。この自主学習で特に重要なポイントは自分で問題点とその解決策を見つけることである。生物学類では卒業研究の指導教官の選択と，卒業研究を通してこのような能力に磨きをかける大切なチャンスがすでに準備されている。それ以降大学院に進学しても社会に出ても同様の能力が要求される。正解のない世界，正解が個人によって違う世界をどうやって生きていくか，社会ではその英知が問われる。

カリキュラムの改革のポイントはまさにこの能力を引き出しやすいものにしていくことだと思う。その際できれば社会の要求にもフィットできたならなお良いのではないだろうか。しかし教官も学生も大学で生活しており，社会の要求を適格に把握できない状況にある。確かに在籍している学生の意見を集約していくことも大切なことであり，その取り組みはすでにクラス連絡会などで行われている。ただ，そこに欠けているのは生物学類の卒業生たちが社会に出て活動をしていく中で，自分たちが生物学類で経験したカリキュラムを振り返ってどう評価しているかということである。カリキュラムの価値は卒業で終わりではなく卒業した後こそ問われるものではないだろうか。生物学類の卒業生たちはわれわれの貴重な知的財産であり，彼らが社会に出てどのようなことを肌で感じているのだろうか，是非知りたいところである。

21世紀は生物学のビッグバンの時代といわれている。環境保全，遺伝子改変，クローン人間，再生医療・・など連日マスコミをにぎわわせているこれらの話題の中枢に生物学がある。さらにネイチャーやサイエンスといった自然科学の最先端をとりあげる雑誌に掲載される論文の何と2/3以上は生物学の領域なのである。このように社会の期待が大きいからこそ激動する社会の変化の中でもわれわれのカリキュラムは常に光を放ち続けるものでなければならない。そのためには多くの生物学類卒業生の意見のみを集約し，それをカリキュラム編成に活用したいと思う。その際，社会で成功して

いる一握りの卒業生の意見のみを重要視すべきではない。さまざまな職種の，さまざまな立場の卒業生からのフィードバックによってカリキュラムは生きてくるし，入学してくる学生に自信を持って提示し履修させる説得力を持つことになる。

このように学生達は社会に出てからは正解のない世界を生きていかなければならないとすれば，その学生に補習とは後ろ向きの本末転倒な話ではないか。と言いながら，生物学類では昨年度より１年生の概論（必修科目）に限り希望者を対象に補習を始めた。補習にさんざんけちをつけておきながらではあるが，これは高校までのカリキュラムの価値観をまだ引きずっている新入生の要望に答えるという，一種のガス抜きのようなものという認識で試行してみたのである。２年生になれば補習が不要であることに気がつくはずだし，何もしないで机上で意味がないというよりは，実行した上で意味がないという結論を出した方がよいと思っていた。しかしである。意外な面で学生にも教官にも評判が良かった。特に筆者の恩師で昨年度で退官された平林民雄先生からの評価は高かった。それは学生との距離が短くなりお互いのコミュニケーションが取りやすかったということである。

教官は講義にも，そしてその中の質疑応答に対してもオフィシャルなスタイルでのぞむ。概論のように100人を越える受講生がいる授業ではなおさらである。しかし，補習となると話は別で，教官も学生もリラックスした顔にかわる。講義では一方通行であった教官と学生の関係が，補習を通してより親密になり，その分野のさらに詳しい情報を積極的に求めて来る学生もいたという。これは当初予想しなかった収穫である。もはや補習を越えた実りある討論の場に変身してしまったようで，もしこのことをきっかけに学生達が自主的に勉学を始めたとしたなら，大学のカリキュラムが目指すべきであると先に述べたゴールに到達してしまうのではないだろうか。

現代社会ではインターネットを通して必要な情報を手に入れることができるが，そのことがますます人間関係を疎遠なものにしている。学生たちが求めているのは新しい情報や知識だけではない。補習を通して教官や友人との議論や討論，場合によっては雑談の中から，学習に対する動機付けが生まれ，自分の手で問題点を見つけそれを解決するための工夫を凝らしていく。この過程で学問の本当の面白さを存分に味わいそれを自主的に広げていくトレーニングができたとしたらこの上ないことである。机の上の改革ではなく，血の通った改革へのヒントはこのような意外のところに隠れているのかも知れない。

（はやしじゅんいち　細胞生物学）